

### 3. スイートコーン（未成熟とうもろこし）

・殺菌剤

FRAC コード	薬剤名	使用方法	使用時期	使用回数	備考
11+7	シグナムWDG	散布	収穫7日前まで	2回以内	
3	チルト乳剤25	散布	収穫7日前まで	2回以内	
3	トリフミン水和剤	散布	収穫7日前まで	3回以内	
			収穫30日前まで	3回以内	とうもろこし (子実)

・殺虫剤

IRAC コード	薬剤名	使用方法	使用時期	使用回数	備考
22	アクセルフロアブル	散布	収穫前日まで	3回以内	とうもろこし
4	アクタラ顆粒水溶剤	散布	収穫7日前まで	2回以内	
3	アグロスリン乳剤	散布	収穫7日前まで	3回以内	とうもろこし
1	オルトラン水和剤	散布	収穫7日前まで	2回以内	
15	カスケード乳剤	散布	収穫7日前まで	2回以内	
9	コルト顆粒水和剤	散布	収穫前日まで	3回以内	
1	スミチオン乳剤	散布	収穫7日前まで	4回以内	とうもろこし
1	ダイアジノン粒剤5	散布	収穫14日前まで	2回以内	
			収穫60日前まで	2回以内	とうもろこし (子実)
1	デナボン粒剤5	散布	雄穂抽出期～雌穂抽出期（但し収穫21日前まで）	2回以内	
3	トレボン乳剤	散布	収穫7日前まで	4回以内	とうもろこし
28	プレバソンフロアブル5	散布	収穫前日まで	3回以内	
			収穫前日まで	3回以内	とうもろこし (子実)
28	ベネビアOD	散布	収穫前日まで	3回以内	
4	モスピラン顆粒水溶剤	散布	収穫前日まで	3回以内	
		散布	収穫14日前まで	3回以内	とうもろこし (子実)

・殺虫剤（参考農薬）

IRAC コード	薬剤名	使用方法	使用時期	使用回数	備考
6	アフアーム乳剤	散布	収穫3日前まで	2回以内	
			収穫30日前まで	2回以内	とうもろこし (子実)

・忌避剤（参考農薬）

薬剤名	使用方法	使用時期	使用回数	備考
キヒゲンR2フロアブル	塗沫処理	は種前	1回	とうもろこし

- 注1) 使用回数はその薬剤の使用回数を記載しており、この他に薬剤に含まれる成分毎に、総使用回数が決められているので、農薬ラベル等を確認してそれを超えないように注意する。
- 注2) 薬剤抵抗性の出現を防ぐため、「FRACコード」や「IRACコード」を参考にしながら他系統剤とのローテーション使用を心掛ける（「薬剤抵抗性管理」参照）。
- 注3) とうもろこしは収穫する生育ステージにより農薬登録上は別の作物になるので注意する（表1）。
- 注4) 適用農作物名が「とうもろこし」の場合は備考欄に記載した。また、「とうもろこし（子実）」に登録がある場合は備考欄に記載したので、スイートコーン以外の用途で栽培する際は参考とする。

表1 農薬登録の適用農作物名とスイートコーン、子実とうもろこし、ヤングコーンへの使用可否

適用農作物名	スイートコーン (ある程度成熟した雌穂を収穫するもの)	子実とうもろこし (種子を収穫するもの、ポップコーン、製粉用等、飼料用を除く)	ヤングコーン (幼果(雌穂)を収穫するもの、別名ベビーコーン)
穀類又は雑穀類	○	○	×
とうもろこし	○	○	×
未成熟とうもろこし	○	×	×
とうもろこし(子実)	×	○	×
野菜類	×	×	○
ヤングコーン	×	×	○

○：使用できる ×：使用できない

病害虫名	防除時期	防 除 方 法	注 意 事 項
黒 穂 病		<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 発病株は孢子が飛散しないうちに切り取って焼却するか土中深く埋却する。</li> <li>2. 発病の甚しい畑は3年間ぐらい他作物に転換する。</li> </ol>	
すす紋病	全 期	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. チルト乳剤25の1,000倍液、シグナムWDG、トリフミン水和剤のいずれかを2,000倍液を10a当り300ℓ散布する。</li> <li>2. 窒素、加里肥料及び堆肥を十分施す。</li> </ol>	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 発病前からの予防散布を徹底する。雄穂抽出期～絹糸抽出期が薬剤散布適期と考えられるが、この時期より初発が早い場合は、散布時期を早める。</li> <li>2. 8月の気象が低温多湿の年に発病が多い。</li> <li>3. 8月中旬早期に肥切れすると発病が多い。</li> </ol>
ごま葉枯病		<ol style="list-style-type: none"> <li>1. すず紋病の耕種的対策に準じる。</li> </ol>	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 高温多湿の年に発病が多い。</li> <li>2. 早期に肥切れすると発病が多い。</li> </ol>
倒伏細菌病		<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 無病種子を用いる。</li> <li>2. 被害の著しい株は抜き取って焼却する。</li> </ol>	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 排水の悪い圃場に発生しやすいので、排水に務める。</li> <li>2. 昆虫の食害による伝染もあり、病勢を進展させる原因となるので、アワノメイガなどの防除を徹底する。</li> </ol>
カラス・ハト (は種～発芽時の鳥害忌避)	は 種 前	<p>[参考農薬]</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. キヒゲンR-2フロアブルの原液を乾燥種子1kg当り20mℓ、塗沫処理しては種する。</li> </ol>	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 塗沫処理後の種子は風乾後には種する。</li> <li>2. 粘度が高いので良く振ってから使用する。</li> </ol>

病害虫名	防除時期	防 除 方 法	注 意 事 項
アワノメイガ	雄穂出穂始期 ～ 揃 期	1. アグロスリン乳剤、オルトラン水和剤、スミチオン乳剤、トレボン乳剤の1,000倍液、アクセルフロアブルの1,000～2,000倍液、カスケード乳剤、プレバソフフロアブル5の2,000倍液、ベネビアODの4,000倍液のいずれかを10a当り2000散布する。 2. ダイアジノン粒剤5、又はデナポン粒剤5を10a当り6kg散布する。	1. 粒剤は株の上から芯部や葉にかかるように均一に散布する。 2. ダイアジノンは葉身の基部に部分的に薬剤が集まると薬害を生ずるおそれがあるので、1ヶ所に固まらないよう均一に散布する。また、葉の水滴が薬害を助長するため、降雨直後や結露がある場合は散布しない。 3. 発生が多い場合は絹糸抽出期に追加防除を行う。 4. アグロスリン、トレボンは蚕毒及び魚毒に、カスケード、プレバソフは蚕毒に特に注意する（特別指導事項参照）。
アブラムシ類	雄穂出穂期 ～ 揃 期	1. アグロスリン乳剤2,000倍液、アクタラ顆粒水溶剤3,000倍液、コルト顆粒水和剤、モスピラン顆粒水溶剤の4,000倍液のいずれかを10a当り2000散布する。	1. 葉裏にもかかる様にていねいに散布する。 2. アグロスリンは蚕毒及び魚毒に、アクタラ、モスピランは蚕毒に特に注意する（特別指導事項参照）。
オオタバコガ	絹糸抽出期	[参考農薬] 1. アファーム乳剤1,000倍液を10a当り2000散布する。	1. アファームは蚕毒に特に注意する（特別指導事項参照）。